

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成20年7月7日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 教 授

氏 名 宮 内 弘

事業区分	平成20年度・短期派遣助成		
研究課題名	ラーキン、イエイツ、ハーディの詩における形式と内容		
受入機関	連合王国、ハル市 ハル大学プリンモア図書館		
渡航期間	平成20年4月11日 ~ 平成20年6月10日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	450,000円	
	使用した助成金額	450,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	旅費(往復航空運賃)	150,000円
		滞在費	300,000円

今回のプロジェクトでは、これまでのイギリス、アイルランドの現代詩における文体論研究をふまえて、ラーキン、イェイツ、ハーディの三人の詩人における形式と内容との関係を具体的なテキスト分析に基づいて追究することをその目的とした。

まずラーキンに関しては、生前彼が館長を務めていたハル大学のプリンモア図書館、及びその内部にあるラーキン資料館を訪れ、そこに保管されている草稿をはじめとする資料を精査し、作品の成立過程をたどることによって、彼の技法や文体を明らかにしながら、それが詩作品の内容とどのように関わっているかを考察した。とりわけ彼は韻に対してなみなみならぬこだわりを持っていた。今回草稿を調べていくうちに、韻に関して彼がいかに苦闘しているかがより明瞭になった。例えばいくつかの詩においては試行錯誤を繰り返した後、これまでにない押韻パターンを生み出して、作品に独特の効果をもたらしている。ふつう押韻パターンは連を単位とするが、彼の場合詩によっては連を超えたものが見られる。これらの詩の場合、従来の詩に慣れた者は一瞬とまどうが、一度ラーキンの押韻の仕組みを理解すると彼の曲芸のような卓越した技巧に舌を巻いてしまうことになる。一見複雑な押韻パターン（形態）がその内容と見事な和音をなしながら対応していることが徐々に実感されてくるからである。その好例が「海辺に」(“To the Sea”)や「私は忘れない」(“I Remember, I Remember”)などであろう。前者では連を超えた押韻パターンがちょうど打ち寄せる波のようなリズムを作り出す。そしてこのリズムによって、詩のテーマ、つまり、毎年夏に繰り返りひろげられる浜辺の光景の中に見られる親子の絆が、波のようにとぎれることのない世代間の慣習として永遠に受け継がれていくことが効果的に示唆されるのである。また後者の詩では、時を隔てた青春の苦々しい記憶の連鎖が、各連をまたぐ押韻パターンとみごとに和合している。

また完全韻と不完全韻との巧みな使い分けも多くの詩で見られることも確認できた。特にラーキンの場合、恋人同士の不信感や感情の行き違い、カップルの不釣り合いな関係を示すときに不完全韻が効果的に用いられていることが顕著であった。また変化のない日常生活を描写した詩では単調な押韻パターンや韻律が多用される傾向があることも明らかになった。さらに韻を踏まないことによって混乱や無秩序を表現したり、正反対の意味を持つ単語、あるいは不協和音を響かせる単語を互いに押韻させることでアイロニカルな響きを示唆したりする例を数多く検証した。

今回の調査では以上のような韻と詩のテーマとの相関関係を明瞭に示す例が多数見つかったことは大きな成果であった。

韻と並んでラーキンの詩作品の特質として二重構造が顕著であることも今回の調査研究でより明確になった。具体的に言えば、ラーキン詩の場合、あるテーマ、思想、感情、ムードの下層部にそれと相反する対立的要素が密かに示唆されていることが多い。例えば「旅立ち」(“Going”)や「お次の方どうぞ」(“Next, Please”)では同じ詩の中で異なったジャンル

のもの(「謎解き riddle」と「シンボリズム」)が同居している。特にラーキンの場合、二項対立的な要素が、それと気づかれないまま二重構造を形成していることが顕著であることも判明した。

これに関連して、韻、韻律、音声、語彙、統語法など複数のレベルで詩の内容と対応する重層化が見られることもラーキン詩の特色であることをつけ加えておきたい(その典型例が「爆発」["The Explosion"]という詩に見られる)。

これまで述べた技巧はラーキンだけに見られるものではなく、ラーキンに大きな影響を与えたイエイツやハーディにも見られる。これらの例もプリンモア図書館を中心に調査することができた。特にハーディの場合、音声と内容との対応関係がラーキン以上に顕著であるように思われる。彼は独自の造語を用いて音の効果を上げる作品を多く書いている。また韻や韻律を巧みに使用することによって詩のテーマを一層引き立てている例も少なくない。これらのことを「声」("The Voice")をはじめとする一連の詩で具体的に検証した。

イエイツ詩においても同様にプリンモア図書館を中心に調査した。彼の場合、前期の詩において押韻はきわめて保守的であったが、後期の詩においては、大胆な不完全韻を多用し、彼独自の詩境を切り開いていったことを多くの作品の中で確認した。また彼は伝統的なさまざまな詩型(八行詩体、ソネット、バラッドなど)を駆使しているが、それが詩の内容とどのように関わっているかも検討した。

以上これらの成果をまとめてできるだけ早い機会に刊行したいと考えている。